



Title	韓日昔話の比較研究：近代の教科書に語られた「瘤取り爺」譚を中心に
Author(s)	金，容儀
Citation	大阪大学，1998，博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/40518
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	きむ	よん	うい
	金	容	儀
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)		
学 位 記 番 号	第 1 3 5 9 5 号		
学 位 授 与 年 月 日	平成10年 3 月 25 日		
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科日本学専攻		
学 位 論 文 名	韓日昔話の比較研究 ——近代の教科書に語られた「瘤取り爺」譚を中心に——		
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 中村 生雄		
	(副査) 教 授 川村 邦光 講 師 川森 博司 国際日本文化研究センター教授 小松 和彦		

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、これまでほとんど研究対象として扱われたことのない日本植民地時代の韓国教科書に記載された昔話である「瘤取り爺」を取り上げ、その形態と内容にかんする詳細な分析をとおして、韓日（日韓）の昔話・伝説をめぐる影響関係の特徴を解明しようとしたものである。また、この研究にあたって申請者は韓日両国における従来の昔話・伝説研究と資料収集の蓄積を縦横に活用し、そのうえにたって、近代日本の植民地教育の具体相を明らかにしようとしている。本論文は、隣国どうしでありながら不幸な歴史を経験してきた韓国と日本という二つの文化圏の相互交渉をめぐるの、比較文化論的関心からなる研究成果である。

全体の構成は、序章と本論全4章および終章からなる。

まず「序章」では問題の所在と研究史の概観がなされるが、そこにおいては従来の研究が韓日双方の昔話・伝説を信頼すべき原文にもとづいて分析することを怠ってきたという、方法的な不備が指摘される。

「第一章」では、植民地時代の韓日の「瘤取り爺」譚の影響関係を考察する基礎作業として、両者の綿密な比較分析と類型化によって類似点・相違点の抽出が行なわれる。具体的には、韓国の当該説話には現在一般に知られている「トケビ型」のほかに「チャンスン型」と申請者が呼ぶ類型があったにもかかわらず、後者は忘れられ前者のみが教科書に採録されることになったこと、また、その理由としては、植民地時代の日本の研究者が前者の話を『宇治拾遺物語』の「瘤取り爺」と類似するものとして注目したことが大きいと指摘する。

「第二章」では、そのような影響関係の具体的様相を韓日双方の教科書の記述に即して明らかにするとともに、昔話の教科書収録をめぐるイデオロギー的背景について考察する。すなわち、朝鮮総督府の「内鮮一体」を企図した植民地同化政策という背景のなかで、教科書採録にあたってさまざまな「改変」が行なわれていった事実が詳細にたどられる。

「第三章」では、これまで考察された影響関係に深くかわる韓国の妖怪「トケビ」と日本の鬼の図像上の関係が分析の対象とされ、前者が植民地時代の「創られた伝統」だったことが解明される。それに加えて、今日の韓国において民族独自の伝統を構築する立場から新たに「トケビ」の図像が試作されている事例が批判的に考察される。

「第四章」では、前3章の考察にもとづいて現代の韓国社会での「瘤取り爺」譚の普及をめぐる問題が検討される。すなわち、解放後の韓国の教科書においても以前と同様の「瘤取り爺」の話が収録されたのはなぜかと問い、そこには現代韓国における童話作家や童話集編纂者の介在があったことが指摘される。

「終章」においては、本論文の方法的な特徴と研究史上の位置を再確認し、残された課題について言及する。

論文審査の結果の要旨

本論文の特徴として評価すべき第一の点は、従来の韓日双方の昔話・伝説研究者の基本姿勢であった系統論的研究あるいは起源遡及論的な研究のスタイルを一新しているという点である。従来の多くの論者が、韓日双方の昔話・伝説の形態論的な比較やモチーフの比較・分析をとおして、個々の話の伝播や影響の関係を古文書と採集資料の双方を突き合わせるかたちで実証的に確定していくことをめざし、その結果として、双方に共通する起源を古代東アジアの神話的宗教的思考のうちに確認したり、あるいは逆に互いの差異の要因を、両者の古代王権の性格の相違や、漢文化にたいする対応の相違などに求めたりする、という手法をとってきた。しかし、申請者はそのような伝統的な手法を捨て、対象を近代植民地時代の「瘤取り爺」譚に絞り込み、韓日の説話世界の近代における接触と遭遇のありかたを、教科書上の記述の丹念な追跡をとおして浮かびあがらせることに成功したと言えよう。

第二の点は、そのための基礎作業として、近年の韓日双方の資料集成である『韓国口碑文学大系』と『日本昔話通観』とを、両言語によく通じる能力をフルに発揮して精密に読み込み、双方の類似点・相違点を原資料に即して確定した点である。日本の多くの研究者は「ことばの壁」の問題もあって限られた翻訳資料に頼りがちであり、また韓国の研究者は朝鮮半島からの日本への伝播という関心に終始しがちであったという問題点が、本論文では見事に克服されている。それに関連して、教科書の挿絵を中心とした図像の比較という手法も効果的であった。

さらに第三の特徴に数えられるのは、韓日比較という課題にたいする申請者の研究姿勢である。それはとりわけ、旧来の韓国における旧世代の研究者のありように根本的な態度の修正をせまるものであると言える。というのは、解放後の韓国における昔話・伝説の韓日比較の基本姿勢は、植民地時代に圧倒的な影響を破った日本的な要素を拭い去り、もっぱら純粋に韓国的な文化伝統を復元し創出しようとする、いわゆる韓国版の文化ナショナリズムに大きく規定されていたためである。そのような解放後の韓国社会の基本的動向、すなわち日本的なものを拒否し韓国的なものを称揚する姿勢が、昔話・伝説研究の場面においても否定しがたく存在したことを申請者は冷静に指摘し、それを「二分法的思考」と呼んで旧世代主導の研究状況を批判するとともに、それを乗り越えるたしかな方向性を提示しえたと言えよう。

以上のとおり、本論文は的確な問題設定、明解な論理構成、目配りのきいた先行研究への言及、簡潔で要を得た叙述スタイルなど、大いに評価できる研究成果であり、とりわけ、日韓両言語に習熟した留学生の特性を十二分に生かした、いわば文化研究分野における国際交流のモデルケースと称していいものだと思う。

とはいえ、むろん本論文にも不足がないわけではない。

その第一は、直接の分析対象を教科書に限定したことから来る問題である。すなわち、教科書に書かれた昔話が授業で教えられるというレベルと、民間で昔話として語られるというレベルの相違にかかわる問題が不問に付されているのは否定しがたく、文化人類学・民俗学の訓練を受けた申請者であれば、植民地時代にこれらの昔話を教えられた人々への聞き取り調査を是非とも敢行してほしかったところである。そうすれば、こうした昔話や伝説の影響関係を教科書というテキストの次元でとらえることの限界が乗り越えられ、植民地という特殊な状況のなかで韓国民衆にそれらがどのようなしかたで受け入れられ、あるいは拒絶され、読み替えられていったのかというダイナミックな歴史状況を複眼的に明示しえたのではないかと悔やまれる。

また第二には、当時の朝鮮総督府の同化政策にもとづく教育行政と教科書編纂にかかわる実情、とりわけ教科書編纂を直接主導した日本側のスタッフや、それに協力していった韓国側の知識人たちとの関係が論及されていないことである。そのため、考察の対象が教科書に「記述された」昔話だけに終始し、それを「記述する」側の動的な実態を浮かびあがらせることができなかった。

以上のように、残された課題は小さくないものの、本論文が着実な作業と抑制のきいた分析の積み重ねによって近代韓日の文化交渉の一面を的確にとらえた労作であることは疑いなく、博士（文学）の学位を授与するに十分値するものであると判断する。